

ロラン夫人獄中記とエレーヌ・ベールの日記

自分の死を見据えて

中 里 まき子

序

ロラン夫人(1754～1793年)は、ヴォルテールらの啓蒙思想を学び、フランス革命に身を投じたが、党派間の主導権争いに敗れると政治犯として投獄され、断頭台で命を落とした。革命後、その生涯はミシュレ『フランス革命史』(1847～1853年)やラマルチャーヌ『ジロンド党史』(1847年)のような著作をはじめ、複数の演劇、絵画、彫塑等の題材となった。ジロンド派の黒幕として手腕を発揮したとしても、内務大臣ロランの妻にすぎなかった彼女が、革命後にフランス共和国のシンボリック的存在となりえたのは、約半年間の獄中生活を通して手記を書き綴ったからである。

本稿ではロラン夫人獄中記を検討するにあたって、第二次世界大戦期のパリで、ナチス・ドイツ主導の迫害を受けながらユダヤ人学生エレーヌ・ベール(1921～1945年)が書いた日記と比較したい。

ロラン夫人とエレーヌ・ベールは、生きた時代が異なる上に、書いた文章の形式も回想録と日記という違いがある。しかし二人とも、迫り来る自分の死を見据えて執筆に取り組んだ末に、不当に命を奪われた点で共通している。確かに、書き手の死を超えて文章が読み継がれることは珍しいことではないし、むしろ、まとまった文章を書く人は、それが自分の死後も読まれる可能性を想定していることだろう。それでも、死を意識するほどにエクリチュールへと専心していく二人の姿は、書く行為と死との関係について新たな考察を促すものである。本稿では、二人の言葉を響き合わせながら、それぞれの特徴と魅力を浮かび上がらせたい。

それに先立って、彼女たちの生涯と執筆の状況を概観する。

1. 書き手たちの生涯と執筆状況

a. ロラン夫人

後のロラン夫人、マリー・ジャンヌ・フリポンは、1754年3月17日、パリの中産階級家庭で、彫版師の父ガティアン・フリポンと母マルグリット・ビモンの間に生まれた。幼い時期から読み書きを覚え、勉学に没頭するようになる。10歳頃の彼女は母に倣って敬虔なカトリック信者であり、1765年3月から一年間、初聖体拝領の準備のためノートル・ダム修道院で寄宿生活を送る。しかしその後、デイドロやダランベールらフィロゾフの著作と親しむうちカトリック信仰に疑問を持ち始め、1775年に不信者になったとされる。また同年6月7日、最愛の母が突

然に病死すると、マリー・ジャンヌは病床に伏し、2週間死線をさまよう。続く回復期に『新エロイズ』を知り、ルソーを「私のための精神の糧¹⁾」として愛読するようになる。数ヶ月後の1776年1月、友人ソフィ・カネの紹介でピカルディ地方の手工業監督官ジャン・マリー・ロラン・ド・ラ・プラティエールと出会う。二人が結婚するのは4年後の1780年2月である。翌1781年2月、アミアンに転居し、同年10月に娘のマリー・テレーズ・ウードラが誕生する。

1789年に革命が勃発すると、ロラン夫妻は第三身分の闘争に共感し、熱狂する。ロラン夫人はその時の心境を次のように綴っている。

革命が突発して、私たちの心を燃え立たせた。人類の友であり、自由の賛美者である私たちは、それが人類を生まれ変わらせ、私たちが実に頻繁に同情してきた哀れな階級の貧困を根絶すると信じた。私たちは革命を熱狂して迎えた²⁾。

1791年2月に二人がパリで居を構えると、ロラン夫人のサロンにはジャコバン派の議員やジャーナリストが集う。1792年3月にジロンド派内閣が成立し、ロランは内務大臣を務める。しかしその後、革命自体、そしてロラン夫妻の境遇も雲行きが変わってくる。1792年8月10日に民衆と軍隊がテュイルリー宮殿を襲撃し、続いて9月上旬には九月虐殺が発生、同様の虐殺がオルレアンなどでも起きると、ロラン夫人は当初は支持していた革命に失望する。また、特にルイ16世処刑問題をめぐってジロンド派とモンターニュ派の抗争が激化し、ジロンド派が劣勢となる。1793年1月21日にルイ16世が処刑され、翌22日にロランは大臣の職を辞するが、それでもロラン夫妻に対するモンターニュ派の告発は止まない。同年6月1日の早朝、ロラン夫人は逮捕され、政治犯としてアベイ監獄に収監される。その際、不在であった夫は逮捕を免れる。その後、彼女は6月24日にサント・ペラジー監獄に、そして10月31日にコンシエルジュリー監獄に移送され、裁判を経て、11月8日、死刑を宣告されギロチンにかけられる。

こうして非業の死を遂げたロラン夫人が19世紀にフランス共和国のシンボリック的存在となりえたのは、約半年間の獄中生活を通して手記を書き綴ったからである。獄中記を構成するのは、まず、革命期の出来事や人間模様を記録した「革命史覚書」である。彼女は逮捕直後から秘密裡に執筆しては面会に来た友人に渡し、保管を依頼した。8月に、保管していた人物の逮捕にともない手記の一部が焼却されたことを知ったロラン夫人は、動揺しつつも、損失を補うために「肖像と逸話」を書き始める。またその時、自身の生涯を幼年期から回想した自伝「私的回想録」にも着手する。さらに10月8日、ジロンド派の壊滅を知ると「最後の断想」を執筆する。

ロラン夫人の死後、残された手記は保管していた二人の友人によって刊行された。1795年のボスク版と1800年のシャンパニユ版である。この獄中記は、19世紀を通して多数の版を重ねるほど好評を博した。

b. エレーヌ・ベール

1921年3月27日、エレーヌ・ベールは、化学企業キュルマン社の副社長レイモン・ベールと母アントワネットの4番目の子としてパリに生まれた。すでに成熟の年齢に達していたロラン夫人が、自らの意思で革命に身命を賭したのに対し、エレーヌはごく若いうちから戦争とユダ

1) Madame Roland, *Mémoires de Madame Roland*, édition publiée avec des notes par C. A. Dauban. Henri Plon, Imprimeur-Éditeur, 1864, p. 133. [Élibron Classics Replicaの複写版を参照]

2) *Ibid.*, p. 177.

ヤ人迫害の渦に飲み込まれていく。1939年9月、ポーランドに侵攻したドイツに宣戦布告したフランスは、1940年6月に降伏。パリを含む国土の北部半分ほどが占領され、ナチス・ドイツとヴィシー政権によって反ユダヤ政策が開始される。

エレヌが日記を書き始めるのは1942年4月である。当時、彼女はソルボンヌ大学の修士課程に在籍し、英文学の論文を執筆しつつ図書室で司書を務めていた。後に婚約するジャン・モラヴィエキと出会うのもこの頃である。同年6月、ユダヤ人に対し、公共の場で「ユダヤ人」と書かれた「黄色い星」の着用が義務づけられる。同月、この記事を規定通りに付けていなかったことを理由に父レイモンが逮捕され、パリの北郊外ドランシーの収容所に拘禁される（3ヶ月後に釈放）。その時エレヌはフランス・ユダヤ教徒連合（UGIF）でボランティアを始め、収容所への強制移送などによって両親と引き離された子どもたちの世話をする。同年11月、婚約者ジャン・モラヴィエキがフランス解放軍に参加するためスペインへ発つと、それを機にエレヌの日記が中断する。1943年7月、UGIFでともに働いていた友人たちが逮捕されるが、エレヌは偶然、逮捕を免れる。同年10月には中断していた日記の執筆を再開する。

1944年3月8日、エレヌは両親とともにパリの自宅で逮捕され、アウシュヴィッツ強制収容所に送られる。そこで両親は殺される。10月末、彼女は北ドイツのベルゲン・ベルゼン収容所に移送される。そして1945年4月始め、24歳で没する。収容所がイギリス軍によって解放される5日前であった。

エレヌの日記はベール家の料理人アンドレ・バルディオに託され、終戦後、エレヌ本人の遺志を尊重して婚約者ジャン・モラヴィエキに渡された。60年以上を経て2008年に初めて刊行された。

2. 手記を読み比べる

ロラン夫人とエレヌ・ベールは、権力による迫害のただ中で、自分の死を予感しながらも平静を保ち、残された時間を執筆に費やした。彼女たちは名のある作家ではなかったが、それでも二人の手記は消失の危機を乗り越えて私たちに伝えられた。彼女たちの声はどのような諧調を響かせるだろう。まず、二人に共通する側面として自分の死について語っている箇所を読んでみよう。

a. 自分の死を見据えて

1793年11月8日に断頭台に上ることになるロラン夫人は、その直前の10月18日、「最後の断想」を書き記す。数葉にわたるこの文章は次のように始まる。

生命とは、私たち自身に帰属する財産なのだろうか？ 私はそう信じる。しかしこの財産は、間違いが起きることがあるという条件のもとでのみ私たちに与えられている。

私たちは幸福を追求するため、そして他者の幸福にとって有益であるために生まれた。社会的身分はこの生命の用途を拡張させる。同様に、新たに作り出すことはなくとも、私たちのすべての能力を拡張させる。

私たちの前に、善をなすことができ、立派な手本を示すことのできる人生がある限りは、そこから去るべきではない。不幸を物ともせずその人生を全うするために注力すべきである。しかし悪意によってそこに期限が定められるなら、それを早めることは許される。と

りわけ、その悪意の最悪の作用に耐える努力が、誰にとっても何も好都合なものを生み出さない場合には³⁾。

ここでロラン夫人は自ら死を早めることも許されると記すが、それは絶望のためではなく、同時代よりむしろ自分が死んだ後の時代にその文章が読まれ、評価されることを望んでいるからである。ルソーを愛読していた彼女は、『告白』に倣って自己のすべてを曝け出す自伝を書き、それを通して、不当に迫害され、排斥された夫ロランと自分の正当性を後世の人々に訴えようとした。

私の願いは叶えられた。迫害され、追放されたロランは、後世において死ぬことはない。私は囚われの身である。おそらく犠牲者として命を落とすだろう。私の意識は、私のすべてを体現するだろう。知恵のみを求め、他にも多くの徳を有したソロモンと同じことを経験するだろう。私は正義の人々の平和しか欲しなかった。そして私もまた、未来の世代にとって何らかの存在感を得るだろう⁴⁾。

ロラン夫人は、自分の存在が同時代人からは否定されても、後世の人々には認められることを確信している。だからこそ、獄中で書いている文章を、自分の死を超えて生き続ける「精神的かつ政治的な遺言⁵⁾」とみなしている。

エレヌ・ベールもまた、日記において自分の死と向き合っている。

自分のうちに感じるすべての可能性を突然に失うかもしれないと、22歳にして自覚する人は、たくさんいるのだろうか。——私は自分のうちに壮大な可能性を感じるということに、なんのためらいも感じない。それは所有物ではなく、天賦の才能なのだと思うから——。それらがすべて奪われるかもしれないというのに、憤らずにいられるだろうか⁶⁾。

ロラン夫人と同様エレヌも、自分の死を直視し、それを不当なことと感じている。そして、自分の死に備えて残された時間をエクリチュールに捧げる点も二人に共通している。エレヌはまだ大学生であるため、ロラン夫人のように一般の人々が読者となる可能性を想定してはいない。それでも彼女は、戦場へと旅立った婚約者ジャン・モラヴィエキに宛てて、自分の死後に読んでもらうための遺言的文章を書いている。

なぜこの日記を書くのか、私はわかっている。ジャンが戻ってきた時、もし私がいなくなっていたら、この日記を彼に渡してほしい。彼の不在の間に私が考えたすべてのことを、あるいは少なくとも一部でも、彼が知ることなしに私は消えたくない。なぜなら私は絶え間なく「考えて」いるから。それは私が発見したことでもある。私が身を置くこの絶え間ない意識⁷⁾。

3) *Ibid.*, p. 389.

4) *Ibid.*, pp. 100-101.

5) *Ibid.*, p. 303.

6) H el ene Berr, *Journal*, Tallandier, 2008, p. 205.

7) *Ibid.*, p. 206.

大学院で文学を研究するエレヌは、自分の死を見据えているからこそ、文学作品の登場人物が自らの死を予感する場面に惹きつけられ、共感を寄せている。例えば、マルタン・デュ・ガール『チボー家の人々』のアントワヌが第一次世界大戦の戦場で毒ガス攻撃を受けた後、自分の死について考える場面⁸⁾や、チャーホフ『ワーニャ伯父さん』における、間近に迫った死を安らぎと捉えるソーニャの台詞⁹⁾を日記に引用している。

b. 証言的価値

ロラン夫人とエレヌ・ベールは自分の死と向き合いつつ、その眼差しを外の世界にも注ぎ続ける。二人はそれぞれに、フランス革命とナチス主導のユダヤ人迫害という歴史的状況を当事者として生き、記録した。彼女たちの文章の証言的価値について、まずロラン夫人による九月虐殺の記述を例に探ってみよう¹⁰⁾。

ロラン夫人は、多数の貴族や聖職者が犠牲となったこの虐殺事件の背景として、恐怖に囚われた大衆心理に着目する。1792年8月20日に始まったプロイセンとの戦闘でフランスは守勢に立たされ、9月1日にはヴェルダン陥落の噂がパリに届く。すると人々は、3日もすれば敵軍がパリに到着すると考え、「荒らされて煙を出している首都にいる外国の軍隊¹¹⁾」を妄想する。またこの時、パリ自治政府が市民たちに向かって、翌日の9月2日にシャン・ド・マルスに集結し、祖国防衛のために出征することを呼びかけると、人々の妄想はさらに加速する。彼らは、祖国防衛のためにパリの男たちが出征すれば、牢獄にいる貴族たちが脱獄し、男たちが不在となった家庭に襲いかかると考えたのである。このようにロラン夫人は、フランス軍の敗戦により恐怖心を掻き立てられた大衆が、その捌け口を、獄中の貴族たちに見出したという虐殺事件の背景を書き留めている。

そして彼女が1793年6月にこの文章を書いているアベイ監獄は、前年の9月に、まさしく九月虐殺が起きた現場である。そのため彼女は、事件の現場に来て初めて知り得た詳細な情報を書き加えている。例えば、サンジェルマン街の留置所からアベイ監獄に囚人を移送するのに、警官が日曜日の夜を選び、その時、囚人馬車に襲いかかるべく殺人者たちが身を潜めていたことを伝えている¹²⁾。古代ローマの歴史家タキトゥスのように年代記を書きたいと思っていた¹³⁾ロラン夫人は、囚われの身となってお情報収集を続け、革命の現実を克明に記録している。

彼女はまた、革命期の出来事のみならず、革命によって消え去っていくと思われるアンシャン・レージュム期の現実についても、後世に書き残そうという意図を持っている。例えば7歳の時に経験した堅信の秘跡について、その習慣が失われ、どういものかわからない未来の読者

8) *Ibid.*, p. 212.

9) *Ibid.*, p. 284.

10) ロラン夫人による九月虐殺の記述については、次の拙論においてより詳細に紹介した。中里まき子「ロラン夫人獄中記の再読：フランス革命の証言として」, *Artes Liberales* (岩手大学人文社会科学部紀要), 第105号, 2019年12月, pp. 35-42.

11) *Madame Roland, op. cit.*, p. 262.

12) *Ibid.*, p. 269.

13) ロラン夫人は記す。「もし私に生きる機会が与えられたなら、ひとつの欲求しか持たないだろう。それはこの時代の「年代記」を書くこと。私の国のマコーリーになること。フランスのタキトゥスと言ってもいいだろう [...]。私はこの監獄で、本当にタキトゥスに熱中している。彼の本の一部を読まずに寝ることはできない。私たちは同じように物事を見ているようだ。この時代、やはり豊かな主題について、私が彼に倣って表現することも不可能ではなかっただろう」(*ibid.*, p. 181.)

に向けて説明を試みている。

状況の運びを踏まえると、この一節を読む人々はおそらく、これは何なのかと尋ねるだろう。私が彼らに教えよう。教会の手前の隅にある礼拝堂あるいは納骨所に、椅子か長椅子を数列、向かい合わせに一定の長さで並べる。中央にかなり広い通路を空けておき、高いところに他よりやや高さのある椅子を置く。それは若い司祭の象牙の椅子であった。彼は任された子どもたちを指導することになっていた。そこで、その日の福音書の一節、使徒書簡、祈り、その週の課題として割り当てられた教理問答の項目を暗唱させるのだった¹⁴⁾。

アンシャン・レジーム期について、ロラン夫人は他にも興味深い現実を記録している。例えば、貴族たちが自分の身分を非常に重視する姿に着目している。彼女は友人ソフィ・カネがパリを訪れた際、ソフィの母の従姉妹であるド・ラモット姉妹に紹介された。貴族であるこの姉妹について次のように記している。

[...] 二人とも、お嬢様として生まれたことの利点に多大な重要性を見出していた。少なくとも爵位を得ていない父親を持つ人と交流することは想像しがたいようであった¹⁵⁾
[...]

また、ド・ラモット姉妹と同居するソフィの母の兄弟ペルデュ氏についてはこう記す。

彼は貴族であることを年老いた従姉妹たち以上に重視していた。そして貴族的な風貌を鼻にかけ、教えを垂れていた¹⁶⁾。

貴族の行動でロラン夫人がとりわけ驚かされたのは、いつも彼女を礼儀正しく迎えていたペノー夫人が一度だけ彼女とその大叔母とを夕食に招いた時のことである。ロラン夫人たちは貴族ではなかったため、客であるにもかかわらずペノー夫人と一緒に食卓を囲むのではなく、配膳室での夕食となった¹⁷⁾。

さらに彼女の求婚者のひとりモリゾ・ド・ロザン氏が、郷里の貴族名鑑に名前があると自慢したことも書き留めている。

[...] 彼は、郷里の貴族名鑑に自分の名前があることに注意を促した。私が持ち合わせておらず、欲しがるとも思うべきでない利点をひけらかす彼は、うぬぼれが強く軽率であると思われた¹⁸⁾。

このようにロラン夫人は、革命期のみならずアンシャン・レジーム期についても貴重な証言を書き残している。

14) *Ibid.*, pp. 7-8.

15) *Ibid.*, p. 89.

16) *Ibid.*, pp. 89-90.

17) *Ibid.*, pp. 97-98.

18) *Ibid.*, p. 113.

続いてエレヌ・ベールの日記の証言的価値を見てみよう。彼女は家族とともに1944年3月8日に逮捕されて収容所に送られたため、日記はその3週間ほど前、2月半ばで途絶えてしまうが、その時まで、苛烈さを増していくユダヤ人への迫害を記録し続けた。

日記においてユダヤ人への差別に初めて言及されるのは1942年4月11日。父のもとに財産没収の通告が届いたことが簡潔に触れられる¹⁹⁾。続いて同年6月1日からの日記では、公共の場で着用を義務づけられた、ユダヤ人であることを示す「黄色い星」の記章が話題に上る。特に6月8日と9日には、記章をつけて大学へ行き、見知らぬ人から後ろ指を指されたり、友人たちの動揺に直面したりした経験を当事者の視点から綴っている²⁰⁾。そして6月24日には、前日、父親が「黄色い星」を服に縫いつけず、スナップで留めていたせいで逮捕され、エレヌたちが警察庁に面会に行ったことが詳細に語られる²¹⁾。9月22日の釈放まで、ドランシー収容所に拘留された父親が東方の収容所に強制移送されるのではないかと、彼女は怯えて過ごすことになる。

それでもその眼差しは、自分自身や近親者だけでなくユダヤ人全体へと注がれる。7月18日の日記には、16日と17日のユダヤ人一斉検挙、ヴェル・ディヴ事件の際に起きたことが記録される。

モンサンジョン嬢の住む地区では、一家全員、父親、母親、5人の子どもが一斉検挙を逃れるためにガス自殺した。

ある女性は窓から身を投げた。

何人かの警官は、人々に逃げるように警告したために銃殺されたようだ。彼らは、従わなければ強制収容所に送るぞと脅された。誰がドランシーの拘禁者たちに食料を送るのだろうか。今では彼らの妻たちも逮捕されてしまったのに。子どもたちは二度と両親に会えないだろう²²⁾。

エレヌは時代の証言者として、自ら対象となっている迫害の現実を的確に書き留めようという姿勢を貫いている。それが顕著なのは、両親とともに逮捕された1944年3月8日の前に、最後に書かれた2月15日の日記である。エレヌはこの日の朝、ヌイイーにて、ドランシー収容所で1週間を過ごしたカン夫人と会い、東方の収容所への強制移送がどのように行われるか、詳細を尋ねた。

私は正確な詳細を尋ねた。出発の1日か2日前、貨車を模した大部屋に集められる。男女混合の60人（おそらくメッス市までは家族を引き離さない）。60人のために、鉛で封印された家畜運搬用貨車の床に敷かれた16枚のわら布団、トイレ用の桶ひとつ（もしかしたら3つ）、いつ捨てる？ 食糧として出発時に各自が受け取る包みには、水で煮た大きなじゃが芋4個、水で煮た牛肉500グラム、マーガリン125グラム、ビスケット数枚、グリュイエールのクリームチーズ半個、パン4分の1斤が入っている。6日間の旅行のための配給である²³⁾。

19) Hélène Berr, *op. cit.*, p. 24.

20) *Ibid.*, pp. 55-62.

21) *Ibid.*, pp. 72-81.

22) *Ibid.*, pp. 105-106.

23) *Ibid.*, p. 291.

迫害の現実を細部まで正確に記録することに加え、エレーヌは、当事者ならではの視点からドイツ兵たちについても鋭い洞察を展開する。ここで彼女が着目するのは、パリの街路での、ユダヤ人に対するドイツ兵たちの人間的な振る舞いである。彼らは、ユダヤ人の虐殺や強制移送に加担する立場でありながら、普段、エレーヌと道ですれ違う時には、殴ることも罵ることもしない。それどころか、地下鉄のドアを開けたまま彼女が来るのを待ったり、「失礼」などと言葉をかけたりと、親切に接することもある²⁴⁾。すなわちドイツ兵たちは、ユダヤ人に憎しみや敵意を持っているわけではなく、ただ命令を実行するためだけに迫害に与しているということである。

このように、迫害の機制に参加する人々が自分で考えることをやめてしまうことを、エレーヌは「悪の基盤」と捉えている。

それに彼らは考えないのだ。いつもこのことに戻ってしまう。私はこれが悪の基盤であり、この体制が拠り所とする力であると思う。個人的な思考や個々の意識の反応を無に帰すること。これがナチズムの第一歩である²⁵⁾。

エレーヌは、恐怖や憎しみの感情に流されることなく、自分を取り巻く現実を広い視野から捉え、人間の本性についての考察を深めている。

c. 豊かな感受性

自らの生命が危うい状況において冷静に事実関係を観察し、書き残そうとする二人の手記には証言的価値が備わるが、それが多数の読者を得たのは、豊かな感受性に恵まれた彼女たちのエクリチュールに文学的価値が見出されるからである。まず、ロラン夫人獄中記の端麗な文章表現をみてみよう。

ロラン夫人がかつて一年間を過ごしたノートル・ダム修道院はサン・マルセル街のヌーヴ・サン・テティエンヌ通りにあるため、彼女が収監され、回想録を執筆しているサント・ペラジー監獄(クレ通り)の近所である。約28年の時を経て、空間的には近いところにいるものの、置かれている状況には大きな隔りがある。彼女はそのことに戸惑いつつ、幸福だった少女時代の一場面を情感豊かに描き出す。

監獄に押し込められ、国を荒廃させ、私の大切なものを押し流す政治的動乱のただ中にある今、静寂と恍惚に満ちたあの時をどうやって回想し、描写することができるだろう。感じやすく敏感な若い心の甘美な感動を表現するには、どんな瑞々しい筆さばきが必要になるだろう。その心は、幸福を渴望し、自然を感じることを覚え、神聖さしか見ていなかった！ 修道院で過ごした最初の夜は落ち着かなかった。もはや両親の家にはいなかった。必ず私のことを心から考えてくれている母から遠く離れていると感じた。ほのかな明かりに照らされた寝室に、私は同年輩の4人の子どもたちと一緒に寝かされていた。私は静かに起き上がり、窓辺に寄った。月明かりのおかげで、窓が面している庭を見分けることができた。最も深い沈黙がこの場所を支配していた。私はある種の敬意をもってその沈黙に耳を澄ました。巨木が方々で大きな影を投げかけ、穏やかに瞑想するための

24) *Ibid.*, p. 292.

25) *Ibid.*, pp. 292-293.

確かな避難所を提供していた。視線を上げると、空は澄んで晴れていた。私は神の存在を感じた。神は私が捧げる犠牲に微笑みかけ、天上的な滞留がもたらす心を慰める平和によって、すでに私に報いていた。心地よい涙が静かに頬を伝った。聖なる興奮とともに私は忠誠を新たに誓った。そして選ばれし者の眠りを味わいに戻った²⁶⁾。

少女時代の彼女は、修道院での寄宿生活に続き、サン・ルイ島の祖母宅で一年を過ごした後、両親の元に戻った。その時のことを回想しながら、ポン・ヌフ近くのオルロージュ河岸にあった両親宅の自室から見えたセヌ川の景色を描き出す。

セヌ川の子である私は、いつもその岸辺に住んでいた。両親の家の界隈は、祖母の住まいのような人気のない静けさとは無縁であった。ポン・ヌフの移り変わる状況は、この光景をめまぐるしく変化させた。私は母の元に戻ることによって、本義と転義において、本当にみんなのところに帰るのだった。それでもなお、限りない空気と広い空間が、私の移り気で夢想的な想像力に贈られていた。北向きの私の窓から、心を高ぶらせつつ、私は何度見入ったことだろう。空の広大な何もなかったところを見事に輪郭が描かれた紺碧の壮麗な穹窿を。シャンジュ橋のずっと奥の青みがかった日の出から、シャイヨの大通りの木々や家々の後ろの七色に輝く夕日までを！ 私は、晴れた日の最後の時間をこうして過ごすことを欠かさなかった。そして歓喜する私の目からは、しばしば甘美な涙が静かに流れるのだった。その時私の心は、えも言われぬ感情に満たされ、生きていることに幸せを感じ、感謝して、最高存在に対し純粋かつ相応な称賛を捧げていた²⁷⁾。

こうしてロラン夫人が自然との交感を重視し、自身の感情の動きを瑞々しい筆致で描き出すように、エレヌ・ベールの日記にも豊かな情景描写が見られる。

他のことを考えよう。オバールジャンヴィルで過ごした夏の一日の現実離れした美しさについて。今日一日は完璧さとともに過ぎていった。明るくて、爽やかさと可能性に満ちた日の出から、さっき錠戸を閉めた時に私を浸した、とても甘く静かで優しい夕べまで。今朝、向こうに着いてじゃが芋の皮を剥いた後、私を待ち受けている歓びを確信しながら急いで庭に向かった。去年の夏に味わった瑞々しくて新鮮な感覚をまた見出した。友だちのように私を待っていたのだ。果樹園から発生する光の雷撃。朝の日差しの中を勝ち誇って高台に上った時の歓喜。あらゆる瞬間に何かを見つけて新たにされる歓び。花咲く柘植の繊細な香り。ぶんぶんいう蜜蜂。ためらいがちに、少し酔ったように飛ぶ蝶の突然の出現²⁸⁾。

繊細な感覚で移ろう季節に心を寄せるエレヌは、見たこと、感じたことを書き記す。彼女の日記においてこうした自然との交感の場面は、抑圧的な社会の現実と対照をなしており、彼女自身そのことに意識的である。

26) Madame Roland, *op. cit.*, p. 30.

27) *Ibid.*, pp. 56-57.

28) Hélène Berr, *op. cit.*, pp. 24-25.

私が本当にバカンスだと感じる最初の日。素晴らしい天気だ。昨日の嵐の後なのでとても爽やか。鳥たちがさえずり、ポール・ヴァレリーの朝のような朝。黄色い星を身につける最初の日でもある。これが今の生活の二つの側面。爽やかさ、美しさ、この澄んだ朝に体现される生命の若さ。この黄色い星に象徴される野蛮と悪²⁹⁾。

エレヌはユダヤ人が社会から排除されていく状況でも自然の美しさに目を向け、その姿勢が彼女を支えているようにも思われる。次の箇所では、「黄色い星」の記事を付けているために守衛に公園から追われても、セーヌ河岸の散策を楽しみ、情景を目に焼き付けている。

事物が最も美しいのは、私が予想していない時である。これほど満たされた今日の午後のことを、生涯思い出すことだろう。彼と一緒にサン・セヴラン教会に行き、それからセーヌ河岸をさまよい、ノートル・ダム大聖堂の裏の小さな公園で座った。限りなく平和であった。

でも私たちは守衛に追い払われた。私の星のせいだ。彼と一緒にだったため、この痛手を実感せず、河岸を歩き続けた。

天候が危ぶまれていたが、ついに嵐になった。私はこの嵐を思い出すだろう。チュイリリー公園の階段で碎け散る豪雨の音、暗い空、バラ色の稲妻を。そのまま何世紀でも過ごしたかった³⁰⁾。

d. 作家になること

迫り来る自分の死を見据えつつ、時代の稀有な証言を魅力的な文章で綴った二人は、そうした自身の営みをどのように捉えていたのだろうか。自分の文章を公表しよう、出版しようといった意図はあったのだろうか。

エレヌ・ベールが日記を書き続けたのは、戦場に向かった婚約者ジャン・モラヴィエキに読んでもらうためであった。同時期にアムステルダムで潜伏生活を送りながら日記を書いたアンネ・フランクは、戦争が終わったら、その日記に基づく本を出版したいと考えていたが、エレヌは出版を想定して日記を書いていたわけではなかった。それでも彼女はある日、自分が生きている現実を本に書いて出版するべきだという考えに至る。それはジャン・モラヴィエキが旅立った後、一年近く日記を中断した後のことである。

一年間の中断の後、今夜、この日記を再開する。なぜだろう？

今日、ジョルジュとロベールの家からの帰り道、私は不意にある印象に襲われた。それは、現実を書くべきだという思い。マルグリット通りからのその帰り道だけでも、事実と思考、イメージと考察の世界であった。本を書くだけのものはある。そして突然に、結局のところ本とは、いかにありきたりなものかを理解した。私が言いたいのは、一冊の本には、現実以外の何があるのか、ということ。人が文章を書くために必要なもの、それは、観察の精神と視野の広さだ。それが欠如していなければ、誰でも本が書けるだろう³¹⁾ [...]

29) *Ibid.*, p. 55.

30) *Ibid.*, p. 139.

31) *Ibid.*, pp. 183-184.

このような発見に続いてエレヌは、現実を記して人々に伝えることは自分の義務であるという考えを展開する。

[...] 私は書くことによって果たすべき義務がある。なぜなら、他の人たちも知るべきだから。他の人たちは知らないのだ、他者たちの苦悩や、ある者たちが他の者たちに与えている痛みを想像さえしないのだと気づかされる辛い経験が、一日のうち毎時間繰り返される。そしていつも私は、語るという骨の折れる努力をしようとする。なぜならそれは義務だから。おそらく私が果たすことのできる唯一の義務だから³²⁾。

では、ロラン夫人はどうだろう。ルソーの愛読者である彼女は、獄中でその著書『告白』を意識した自伝を書き、さらにタキトゥスのように年代記を書きたいとも記しているが、はたして、作家になろう、本を出版しようという意思を持っていたのだろうか。

監獄で執筆を続けるロラン夫人は確かに、自身の境遇が特異なものであることを踏まえて、その文章が後世の人々に読まれる可能性を想定している。

私はそれ [= 若かった頃] をもっと思い出し、流れを辿ろうと努める。もしかしたらある日、私の素朴な文章はどこかの哀れな女囚を各瞬間において魅了し、彼女は私の運命に同情して自分の運命を忘れることだろう。もしかしたら、小説の展開や劇の筋立てにおいて人の心を描きたいと願う哲学者たちが、それを私の物語に見出すだろう³³⁾。

彼女はごく若いうちから文章を書くことを好んだが、それは書き記すことによって自分の考えを明確化したり、考察の進展や変化を把握したりできるからであった。そのため長期にわたって文章を書き溜めていたものの、それを公にして、作家になろうとは考えていなかった。その理由は次のように述べられる。

私はいつか作家になりたいという気持ちを少しも持っていなかった。とても早いうちから、この肩書を得る女性は、手に入れるよりもずっと多くのものを失うことを知っていた。男たちは女が作家になるのを好まない。女たちはそれを批判する。もし女性作家の作品が劣っていれば、人は彼女を嘲笑する。当然のように。もし優れていれば、人はそれを奪ってしまう。もし、彼女が素晴らしい作品を生み出したと認めなくてはならないとしたら、人はその性格、習慣、行動、才能の粗探しをし、彼女の精神の評判を、強調された欠点で汚して釣り合いをとる³⁴⁾。

ここでロラン夫人は、女性が作家になることが社会的に受け入れられないことを指摘している。彼女はまた、敬愛するルソーの教えに従い、家庭内にこそ女性の幸福があると記している。

ルソーは私に、私が切望することのできる家庭内の幸福を、私が味わうことのできるえも

32) *Ibid.*, p. 185.

33) *Madame Roland, op. cit.*, p. 49.

34) *Ibid.*, p. 135.

言われぬ陶醉を私に示した³⁵⁾。

ロラン夫人が愛読したルソー『新エロイズ』において、ヒロインのジュリは、神秘家のギュイヨン夫人を批判的に論じており、そこには女性が社会に進出することへのルソー自身の眼差しが反映されていると考えられる。

ですからあなたがお話しになったあのギュイヨン夫人は、私の考えでは、信仰の本を書こうとしたり、司教たちと議論したり、得体の知れない瞑想のためにバステューユに投獄されたりするよりは、一家の主婦としての義務を入念に果たし、キリスト教徒らしく子どもたちを育て、自分の家を賢明に監督するほうがよろしかったのです³⁶⁾。

ルソーの著作に示されたこの見方は、革命期においても夫ロランの補佐に徹し、自らは表舞台に立たないというロラン夫人の姿勢につながるものである。

エレヌ・ベールとロラン夫人には多くの共通点が見られるが、作家になることに関しては二人の考えは異なっており、そこに100年以上の時間の流れと社会状況の変化を読み取ることができる。

e. 死の意識とエクリチュール

エレヌ・ベールの日記は複数の外国語に翻訳され、世界中で読まれている。そしてロラン夫人獄中記は19世紀を通して版を重ね、スタンダールら作家たちに影響を及ぼした。二人のテクストは多数の読者を得たが、彼女たちにとってのエクリチュールは何よりもまず、自分自身を支え、精神面での成長を促すものであった。そのことは、書き始めた当初と比べて書き手が変貌を遂げ、考察がより深まっていくことによって裏付けられる。

特にエレヌは日記を書いたため、毎日の記述の変化を容易に辿ることができる。そして彼女自身、日記を読み返した時、日記には「二つの部分」があることに気づく。

この日記には二つの部分がある。最初のほうを読み返してそう気づいた。後に語られるべき思い出を維持するために、義務で書いている部分。そして、ジャンのために書かれた部分、私と彼のために。

もし私が逮捕されても、アンドレがこの日記を保管してくれると思うと、幸せを感じる。私の一部であり、私にとって最も貴重なものを。というのも今では、物質的なもので執着するものは他に何も無いから。守るべきものは、魂と記憶である³⁷⁾。

ここでエレヌが指摘する日記の「二つの部分」とは、一年近く日記を中断する前と後と捉えて間違いないだろう。そして、ジャンのために書かれた再開後の部分こそが、彼女の「魂と記憶」であると考えられる。1942年11月に婚約者ジャン・モラヴィエキが戦場へ向かったことを契機として一旦は日記を書けなくなったエレヌは、1943年10月、彼が不在だからこそ書かなくてはならないという認識に至る。

35) *Ibid.*, p. 133.

36) Jean-Jacques Rousseau, *La Nouvelle Héloïse II*, Gallimard, 1993, p. 337.

37) Hélène Berr, *op. cit.*, p. 213.

そのような心境の変化の要因として決定的であったのは、1943年7月30日に、ピヤンフザンス通りのUGIFの事務所でも働いていた友人たち全員が逮捕され、偶然そこに居合わせなかった彼女がひとり逮捕を免れた経験ではないだろうか。実際、同年10月に日記を再開すると決意した後、随所でこの出来事に言及している。

あの事務所と友人たちの思い出が私から離れることはない。でも、些細なことに気づいてはっとして、あのことをより強烈に、あるいは別の仕方、不意に別の入り口からあの状況の側面を見るように、実感することがある³⁸⁾。

昼食の後、ステルン夫人と話すためにピヤンフザンス通りに行った。私たちの事務所だったところに、法律課の弁護士たちが配置されてしまったとは、なんと悲しいことだろう。もはや誰も私のことを知らない。それはどうでもいいことだ。彼らは私が経験したことを知らない。私は友人たちの思い出を、手つかずのまま持ち帰った³⁹⁾。

7月30日の一斉検挙の後、長い間、自分は難破の後ひとりだけ生き残ったという胸を締め付ける感覚に襲われた。ある一節が頭の中で踊り、ぶつかった。探したわけではないのに、それは私に押し付けられ、私に取り憑いた。『白鯨』を締めくくる「ヨブ記」の一節だ。そして私はただひとり、あなたに語るために逃げ帰った (And I alone am escaped to tell thee⁴⁰⁾)。

日常的に事務所でも働いていた友人たちが逮捕されたことは、エレヌにとって、自分自身の逮捕、強制移送、そして死を、真に差し迫ったこととして感じる機会となったはずである。それは彼女に、現実を書き記して伝えることの使命感に加えて、自分自身の生きた証——「魂と記憶」——を残そうという強い意思を与えたことだろう。

死の意識が、生きた証を残すためのエクリチュールを促すという流れは、アネット・ヴィヴィオルカが『証言者の時代』において紹介しているミシェル・ボルヴィッツの考察とも符号する。ワルシャワのゲットーにおいてユダヤ人が書いたテキストを検討したボルヴィッツは、1942年を境に書かれるテキストの量が増え、質的にも変化があったことを指摘する。その時まで、ユダヤ人たちはドイツの敗北は目前であると確信していたが、1942年にゲットーから死の収容所への大移送が始まると、ユダヤ民族の全滅を予感するようになる。民族が減び、いかなる後継者も、いかなる記憶も残すことができないという認識ゆえに、生きた証を残すためのエクリチュールが不可避の欲求として浮かび上がってくる⁴¹⁾。

このような死の意識とエクリチュールとの関係は、ユダヤ人迫害の文脈とは関わりのないロラン夫人獄中記にも見出される。

ロラン夫人は革命後、ルソー『告白』を精神的に継承する自伝作家として評価されたため、彼女の獄中記の多くの版では、自伝である「私的回想録」が冒頭に収録され、幼年期の回顧から記述が始まる。しかし実際には、彼女は牢獄においてまず「革命史覚書」を書き、その一部

38) *Ibid.*, p. 200.

39) *Ibid.*, p. 215.

40) *Ibid.*, p. 224. エレヌ・ベールによる『白鯨』からの引用は正確ではない。

41) Annette Wiewiorka, *L'Ère du témoin* [1998], Plon, 2013, pp. 33-34.

が消失するという苦い経験を契機として、自分の死を直視し、生きた証である「私的回想録」を書くようになった。その経緯を辿ってみよう。

1793年6月1日に逮捕された彼女は「革命史覚書」を書いては友人に保管を頼んでいたが、8月はじめに友人が逮捕された際にその一部が消失したことを知る。

私は囚人生活の最初の時間を執筆に費やした。私は急いで書いたし、恵まれた状況であったため、ひと月もしないで一冊の12折り本ほどの手稿ができた。「革命史覚書」という標題で、私の立場ゆえに知り得た、公的な出来事に関わるすべての事実と人物の詳細を記した。[…]

最近のことに至るまですべてを書き上げたところだった。私はそれをある友人に託し、彼はそれに高い価値を見出していた。突然、嵐が彼に襲いかかった。逮捕される瞬間、彼は危険のことしか考えず、それを避ける必要のみを感じた。そして、急場しのぎの方策に思いを巡らすこともなく、私の手稿を火に投じた。白状すると、私は自分の身を火に投じてほしかった。この消失は、それまでの最も辛い苦難よりも私を動揺させた⁴²⁾。

ロラン夫人が獄中で綴り、友人に預けていた「革命史覚書」は、彼女にとって大変貴重なものであった。それを失う経験は彼女に、自分の生命の危機を直視させ、書いた文章も、あらゆる生きた証も、何も後世に伝えることができない可能性を認識させたことだろう。実際、7月6日にビュヅに宛てた手紙には、状況が好転して自分は必ず解放されると書いているが（「状況の好転によって私が解放されることは間違いありません。問題は待つことだけです⁴³⁾」）、8月に「私的回想録」を書く彼女は、自分に残された時間がどれほどあるかを自問している（「私にはあとどれだけ残されているだろう。祖国の荒廃や、同国人たちの墮落の目撃者となる日々が⁴⁴⁾！」）。この認識の変化を経て初めて、ロラン夫人は自伝に着手し、生きた証を残すためのエクリチュールに真摯に取り組むようになる。

[…] こうして最初の5週間は「革命史覚書」に捧げられ、その文集はおそらく興味深いものであった。それは消失したところである。[…] 私の「覚書」は失われた。これから「回想録」を書こう […]⁴⁵⁾。

結びにかえて

ロラン夫人とエレヌ・ベールは、読書を愛し、文筆を好んだ。彼女たちが生きた時代は、19世紀という文学的には非常に豊かなひとつの世紀によって隔てられている。それでも二人はいずれも、歴史の動乱に飲み込まれ、若くして非業の死を遂げた。彼女たちの資質、慧眼、精神力が、人類の不幸な歴史を記録するために用いられたことは悲しいが、二人の文章が現代ま

42) Madame Roland, *op. cit.*, pp. 302-303.

43) Madame Roland, « Lettre à Buzot », dans *Mémoires de Madame Roland*, publiés par Claude Perroud, Librairie Plon, 1905, p. 356.

44) Madame Roland, *Mémoires de Madame Roland*, édition publiée avec des notes par C. A. Dauban. Henri Plon, Imprimeur-Éditeur, 1864, p. 48.

45) *Ibid.*, pp. 2-3.

で継承されたことは救いであった。

ロラン夫人獄中記とエレヌ・ベールの日記は、その魅力は明白でありながら、論じるのは容易ではない。その理由のひとつとして、おそらく、彼女たちが出版を意図した「作品」を書いたわけではないことが挙げられるだろう。二人とも、全体的な構成を検討したり、書いた文書を読み返したりする時間もなく、書き続けるしかなかった。しかし、この執筆状況の相似性ゆえに、二人の文章を比較して読むことは理解を深める上で有効であった。他の書き手による手記も加えて、さらに豊かな読解の展望を開くことができるだろう⁴⁶⁾。

46) 本稿は、日本学術振興会・2020年度科学研究費助成事業（基盤研究C）「ロラン夫人の記憶の継承に関する研究」（課題番号20K00488 研究代表者・中里まき子）の研究成果の一部である。